

『アリス』の庭と『トム』の庭

— ヴィクトリア時代の英国庭園

安 藤 聡

ヴィクトリア時代の庭園は英国庭園史において概して評価が低い。造園家・庭園史研究家ペネロピー・ホブハウス（1929～）によれば、ヴィクトリア時代の庭は二十世紀の大半にわたって酷評され続け、世紀転換期に初めて見直され復元されるようになった⁽¹⁾。ヴィクトリア時代後半からエドワード時代にかけて人気を博した園芸作家・造園家ウィリアム・ロビンソン（1838～1935）は、ヴィクトリア時代を「イングランドで最も醜い庭園が造られた」時期と断定する⁽²⁾。ウィリアム・モリス（1834～96）もまた1880年の講演において、同時代の英国庭園を「不毛で擬いものの小さな庭」と強く批判している⁽³⁾。自然を尊重するのが英国庭園の伝統である以上、過度に人工的で装飾的ないわゆる「ヴィクトリアン・ガーデン」が嫌悪されるのは無理からぬことなのかも知れない。だがこの時代の庭園は英国の庭園史において特異な存在であるだけに、文化史的に興味深いものであるだけでなく、次の時代の庭園の在り方をある程度方向づける影響力を有していたとも言える。本稿では同時代の『不思議の国のアリス』（および『鏡の国のアリス』）と半世紀以上後の『トムは真夜の庭で』に描かれた庭に注目しつつ、ヴィクトリア時代の英国庭園の特質と背景、そしてその影響を考え直したい。

1. ヴィクトリアン・ガーデンとは何か

ヴィクトリア時代（1837～1901）は言うまでもなく大英帝国の全盛期であり、1832年の第一次選挙法改正を含めた三度の選挙法改正によって社会の構造が大きく変わった時期でもあり、ディケンズやギャスケルの小説に描かれている通り工業化・都市化が急速に進んで貧富の差が拡大した時期でもあった。庭園史の上でも前世紀の自然風景庭園から人工的な装飾を含む整形庭園への回帰という大きな変化が見られる。風景庭園の巨匠ランスロット・ブラウン（1716～83; 通称「ケイパビリティ・ブラウン」）の後継者を自称するハンフリー・レプトン（1752～1818）も、十九世紀になると依頼主の意向を受けて装飾的な花壇を復活させている。十八世紀の風景庭園は自然を重視する「ブラウン派」と（クロードやプッサンの）「絵のような」庭を理想とする「ピクチャレスク派」という二つの大きな流れに分かれたが、十九世紀には超人的な執筆活動を続けたことでも知られる園芸作家J・C・ラウドン（1783～1843）が園芸誌『ガーデナーズ・マガジン』（1826 創刊）で、装飾的要素が顕著な「庭らしい庭」を表わす「ガーデネスク」というコンセプトを普及させた（名称に暗示されている通りこれはピクチャレスク派へのアンチテーゼを含意する）。

ラウドンの『ガーデナーズ・マガジン』だけでなくジョウゼフ・バクストン（1803～65）やジョン・リンドリー（1799～1865）らによる『ガーデナーズ・クロニクル』（1841 創刊）、ロビンソンの『ザ・ガーデン』（1871 創刊）など、十九世紀中葉になると印刷技術が進歩したこともあって、園芸に特化した定期刊行物が相次いで発刊された。この背景には当然のことながら造園人口の増加があり、これらの雑誌を支えたのは自宅に庭を造る中産階級の郊外生活者という、この時期に急増した種類の人々であった。一方で十九世紀は植物採集家（plant hunter）の全盛期でもあり、躑躅、石楠花、蘭、菊、紫陽花、ペゴニ

『アリス』の庭と『トム』の庭

ア、ダリアなど今日普通に見られる各種外来植物が英国の庭園に導入された時期でもある。また、この世紀の初めにフランスで始まった薔薇の品種改良が英国にも波及して、新種の薔薇（いわゆるモダン・ローズ）もこの頃から人気を博している。ヴィクトリア時代には郵便制度や鉄道網が整備されたこともあって種子や苗の通信販売が可能になり、これまで見られなかったような花の色彩によって英国の庭が目に見えて変化した。多様な植物の入手が容易になったことから花壇の花を頻繁に植え替えることが多くなり、背の低い花を密集させてカーペット状に植えて色彩を強調した毛氈花壇（carpet bedding）もこの時期に流行した。

新興中産階級の郊外の庭が庭園史の表舞台に台頭したと同時に、ヴィクトリア時代にはカントリー・ハウスの庭も大きく変わり、屋敷と風景庭園の間に新たに大花壇（parterre）を特徴とするテラスが造られる例が多く見られた。例えばトレンタム・ホール（スタフォードシャー州）では、ブラウンによる湖と屋敷の間に建築家チャールズ・バリー（1795～1860）がテラスを、造園家 W・A・ネスフィールド（1793～1881）が大花壇を造った。ハーウッド・ハウス（ウェスト・ヨークシャー州）には十八世紀後半にブラウンが風景庭園を造っていたが、1840年代に屋敷側にバリーとネスフィールドがテラスと大花壇を追加している。1790年代にレプトンが風景庭園を造ったタトン・パーク（チェシャー州）には1840年代後半にパクストンによってテラスが造られた。

テラスはルネサンス時代に流行したイタリア式庭園の特徴の一つである。郊外住宅でもカントリー・ハウスでも、ヴィクトリア時代の庭は概してルネサンス時代のイタリア式庭園への郷愁を内包していた。レプトンの花壇もラウドンのガーデネスク様式も当初は不規則な輪郭を特徴としていたが次第に規則的・幾何学的になり、よりイタリア式庭園に近づいたと言える⁽⁴⁾。このような時期に書かれたのが『不思議の国のアリス』であった。

2. 『アリス』の両義的な庭

ともすればルイス・キャロル（1832～98）には時代を超越したイメージがあるかも知れないが、1850年代に写真機を購入して写真撮影を始めていることが典型的に示すように、この作家・数学者は紛れもなくヴィクトリア時代の人であった。『不思議の国のアリス』⁽⁵⁾（1865）も冒頭でウサギが懐中時計を手遅に遅刻することを危惧しつつ走っている時点で、時代背景を如実に反映していることがわかる。懐中時計の普及も分刻みで時間を気にする生活も、1830年代以降の鉄道の時代に特有のものであろう。

第一章でウサギを追って穴に入り、緩慢な落下を続けて「不思議の国」に迷い込んだアリスは、壁の小さな扉から続く狭い通路の先に「これまでに見たこともないほど美しい庭園」（28）があるのを見る。彼女は無論この庭に行きたいのだが、扉も通路も小さ過ぎて通り抜けることが出来ない。テーブルの上に小さな瓶があるのに気づいたアリスは、そこに入っている飲み薬を飲んで縮小し、庭に行こうとするものの今度はテーブルに置かれた鍵に手が届かない。次にアリスはテーブルの下に小さな硝子の箱があるのを見て、その中のケーキを食べたところ今度は大きくなり過ぎてしまう。こうしてアリスは縮小と拡大を繰り返すが庭にはたどり着けず、この庭に行くことを第七章末尾まで希求し続ける。

この庭はそういうわけでアリスの願望や憧憬の象徴であり、相反する二つの意味を同時に暗示する。庭すなわち 'garden' の原義は「塀で囲われた土地」であり、囲われて守られた「安全圏」, 「聖域」を含意するゆえに、保護された安全な環境で限定的な自由が保障された幼年時代の暗喩になり易い。キャロルとはほぼ同時代に活躍した絵本作家ケイト・グリーンナウェイ（1846～1901）もしばしば庭を幼年時代の表象として描いている。大き過ぎて庭に到達できないア

『アリス』の庭と『トム』の庭

リスにとって、小さな扉と通路の向こうに見える庭は幼年時代の象徴に他ならない。ヴィクトリア時代の庭の花壇が頻繁に植え替えることを前提に造られていたことを思えば、一過性の花壇が醸し出す庭の情景は幼年時代の有限性の暗喩でもあると解読できよう。

他方で例えばチャーサーが『カンタベリ物語』(1387 頃)の「貿易商人の話」にしみじみも描いているように、庭は囲われた個人的空間である故に性的な快楽の場を暗示する。小さ過ぎて庭に辿り着けないアリスにとってその庭は大人の世界の暗喩でもあり得る。数年後に思春期を迎えるはずのアリスは、子供の世界と大人の世界の狭間で行き場を失っているのであり、その所在なさや違和感を暗示するのがこの「不思議の国」の「居心地の悪さ」なのである⁽⁶⁾。両義的な庭が暗示する二つの意味のいずれにおいても、庭は囲われて外界から遮断されている必要がある。外の風景に対して開かれた十八世紀の風景庭園とは対照的に、十九世紀の庭園では再び「囲われて」いることが強く意識され、塀や生垣が重視された。アリスの両義的な庭はいずれの意味においても時代の産物であると言えよう。

アリスが憧れる庭はしかしながら、物語中ではそれほど詳細には語られない。物語全体を通して数少ない庭の具体的な描写を拾い読みすると、まず第一章で最初に庭を見た場面に「色鮮やかな花の咲く花壇と涼し気な噴水」(28)への言及がある。第七章末尾の、ついにアリスが庭に行き着く場面でも、「アリスは気づくついにあの美しい庭の中にいた。色鮮やかな花壇と涼し気な噴水のある庭に」(103)と語り手が言う。これに続いて第八章冒頭に「大きな薔薇の木が、庭の入り口近くに立っていた」(104)という記述があるが、庭の具体的な説明はこの程度しか見当たらない。その他に、有名なジョン・テニエル(1820~1914)による挿絵に温室と思しきドーム屋根が描かれていること(108)にも注目しておきたい。物語中で確認できるのはこのように花壇とそこに咲き誇る色鮮やかな花、噴水、薔薇、そして温室だけだが、これだけでも時代を特

定するには十分であろう。

花壇が繰り返し強調されているということは、この庭がラウドンの言う「ガーデネスク」つまり装飾的要素が際立つ「庭らしい庭」であることが明白であり、しかもこの作品が書かれたのが十九世紀中葉であることを勘案すれば、この花壇は初期のラウドンが提唱した不規則な輪郭を持つ花壇ではなく、ある程度規則的・幾何学的な形の花壇であると考えるのが自然であるに違いない。噴水も風景庭園の時代には影を潜めていてラウドンの時代に復活した。花壇の色彩も二度にわたって強調されているが、英国原産の花の落ち着いた色彩とは違う外来種に特有の派手な色彩は、ヴィクトリア時代の庭園に顕著に見られる特徴の一つであった⁽⁷⁾。薔薇もまたヴィクトリア時代の庭園によく見られた。トマス・リヴァーズの『薔薇愛好家のための案内書』(1837)、ウィリアム・ポールの『薔薇園』(1848)、シャーリー・ヒバードの『薔薇の本』(1864)など薔薇に特化した園芸書がこの時期に相次いで出版され、薔薇愛好家が急増している⁽⁸⁾。一方で十八世紀末以降は鋳鉄が普及し、十九世紀初頭に板硝子の発明があり、1845年に硝子税が廃止されたことによって、十九世紀中葉には温室が人気を博した。1851年のロンドン万博の会場としてパクストンが建てた大温室(いわゆる水晶宮^{クリスタル・パレス})は当時の技術の粋を集めたものであり、ヴィクトリア時代の繁栄の象徴でもある。このように、『不思議の国のアリス』に見られるわずかな庭園の描写から、それが典型的なヴィクトリア時代の庭であることが読み取れるのである。

第七章末尾でアリスは図らずも庭園に行き着くが、そこはトランプの札の庭師が白薔薇を赤く塗っているような荒唐無稽な庭であった(これは当時流行していた薔薇の品種改良に対する揶揄とも解釈できよう)。そこでは「首を斬れ」が口癖の王妃が横暴に振る舞っていて、アリスはこの庭でも違和感を禁じ得ない。この庭を幼年時代の隠喩と解釈すれば、この違和感はヴィクトリア時代の上層中産階級の子供が置かれた居心地の悪い境遇を暗示するとも考えられる

『アリス』の庭と『トム』の庭

し、この庭が大人の世界の隠喩であればそれは早晩アリスが経験するであろう大人の世界への失望を予言する。両義的な庭はいずれの意味においてもアリスを幻滅させるものなのである。

続編『鏡の国のアリス』（1872）第二章でアリスは言葉を話す花の庭に行く（206～210）。ここでも大きな花壇とボーダー（壁際の細長い花壇）の存在が強調され、中心部には柳の木が聳えている。ここでアリスと話す花はオニユリ、雛菊、薔薇、スマレ、ヒエンソウであるが、このように外来種と国産種が混在している点もヴィクトリア時代的であると言えよう（オニユリは日本から中国にかけて分布、雛菊はイングランド原産、スマレは北米原産、ヒエンソウは十六世紀に南欧から帰化）。この庭でもアリスは花との会話が噛み合わず、やはり違和感を禁じ得ない。

『アリス』の庭のモデルは、アリスのモデルとなった少女アリス・リドル（1852～1934）の自宅でもあったクライスト・チャーチの学寮長邸の庭とも、キャロルがしばしば訪れていたオクスフォード植物園とも考えられる。植物園は植物学教授チャールズ・ドーブニー（1795～1867）と植物学者・学芸員ウィリアム・バクスター（1787～1871）によって1850年代初頭に改装され一般公開された。当時の様子を正確に伝える資料は手許にないが、一般大衆に見せるための改装であれば多少なりとも当時の流行の様式を採り入れていたと考えるのが自然であろう。その頃の学寮長邸の庭についても詳細は不明だが、当時のラウドンの影響力を考えれば多かれ少なかれ「ガーデネスクな」庭であったと推測できよう。いずれにせよ、同時代の庭から何らかの靈感を得て書かれているはずの『アリス』の庭は、ヴィクトリア時代の庭園に顕著な特徴のいくつかを正確に捉えて描かれているのである。

3. 『トム』の一義的な庭

フィリップ・ピアス (1920~2006) の『トムは真夜中の庭で』⁽⁹⁾ (1958) は夏休みに不本意ながら叔父叔母宅に滞在することになったトムが、真夜中の「13時の鐘」に誘われて、現実には存在しないはずの「庭」を訪れる物語である。作品の執筆とほぼ同時代と思われる二十世紀中葉の少年トムは、自分が每晚過去の庭に迷い込んでいることと、そこがヴィクトリア時代であることを、会話の内容や服装などいくつかの手掛かりから解明する。叔父叔母の家は田舎屋敷を改装した集合住宅で、かつて地主メルボーン家の邸宅だった時には広大な庭があった。トムは每晚、少しずつ異なった季節や時代の庭を訪れることになり、庭で出会ったメルボーン家の養女ハティも物語の後半では（トムが気づかぬうちに）大人になって行く。

第二章でトムが初めて庭に辿り着いた場面にこの庭の具体的な描写がある。そこには広い芝生と花壇があり、背の高い樅 (fir-tree), 生い茂って枝の垂れた榎 (yews) が数本、大きな温室、芝生の四隅からそれぞれの方向の木立に分け入って延びる曲がりくねった歩道がある (24)。この庭についても、『アリス』の庭と同様、これだけの描写からでも時代をある程度特定することが可能であろう。広い芝生は芝刈機が発明された1830年以降、さらに限定すればそれが改良され普及した1860年代以降と考えられるに違いない。花壇があるということは、早くともレプトンの晩年以降、そしておそらくはラウドンの全盛期以降である。温室は前述の通り十九世紀中葉かそれより後に違いない。そして温室には「外では決して咲かないような奇妙な花」が咲いていて (78~79)、この点も優れてヴィクトリア時代的であると言えよう。曲がりくねった歩道は、幾何学的で装飾的な庭に回帰していたヴィクトリア時代に「自然な」庭を提唱したロビンソンの影響に他ならない。先に触れた通り園芸雑誌『ザ・ガー

『アリス』の庭と『トム』の庭

デン』の創刊は1871年であり、ロビンソンの影響はそれ以降である。ロビンソンはまた、寒い季節に庭の色彩を楽しめるように、耐乾性の高い外来植物（特に高山植物）の植栽を推奨した。メルボーン家の庭にはロビンソンが栽培を奨励したニオイアラセイトウ（wallflowers）やエゾギク（asters）が咲いている（49）。以上の点に注目すると、この庭が紛れもなくヴィクトリア時代後期のものであることがわかる。自分が毎晩ヴィクトリア時代の庭を訪れていることに気づいたトムは、それをおよそ百年前と考え、現実世界ではハティは既に死んでいると思いつ込んでいた。もしトムに庭園史の知識があったなら、そこが半世紀かせいぜい六十余年前の庭であることに気づいていたであろう。

メルボーン家の庭は生垣や高い煉瓦の壁で囲われている（参考までに、煉瓦税廃止は1850年）。この庭もまた囲われた「安全圏」であり、それはトムとハティの幼年時代の暗喩であるに違いない。幼い頃のハティは庭の外に出ることを禁じられていて、継母（伯母）に冷遇され三人の従兄には相手にしてもらえず、孤独な日々を過ごしていた。一方トムは、庭もなく遊び相手もない叔父叔母宅で夏休みを過ごすことを余儀なくされ、退屈して不満を抱えていた。この二人が庭で出会ったことで、それぞれが元来あるべき幼年時代を回復することが出来たと言えよう。ハティはある程度成長しても庭に留まり、外の世界に関心を示さない。ハティが庭から出ようとしない故に年齢の割に成長していないことを指摘する第十七章の従兄ジェームズの台詞（137）は、幼年時代の暗喩としての庭の意味を明確に裏付けている。だがハティもさらに齢を重ね、トムとの年齢差もいつの間にか拡大し、第二十二章ではトムが庭で遊びたがるのに対してハティは外に出ることを切望して、寒波で凍結した川をスケートで下って、トムが以前から憧れていた大聖堂のあるイーリーまで二人で行くことになる。庭から出ることも、川を下ることも、大聖堂の塔の階段を登ることも、等しく二人の成長を暗示する。

『アリス』の庭が両義的であったのとは対照的に、『トム』の庭は幼年時代の

表象という一つの意味だけを一貫して伝えている。ハティは外の世界に関心を移し、庭を出たために大農場の若旦那ヤング・パーティと出会い、そこで意気投合して一年後に結婚することになった。ハティが大人になった結果として庭という逃避の場を喪失したトムも、庭を失ったことで時間に支配される世界の有限性や過去と現在との連続性を理解して、そのことを通して大きく成長した。このような意味で、ヴィクトリア時代後期の囲われた『トム』の庭は、トムとハティの限りある幼年時代の表象に他ならないのである。

4. ヴィクトリアン・ガーデンの意味と影響

ヴィクトリア時代の庭はこのように、物語の中の僅かな描写を概観するだけで時代を特定できるほどに顕著な特徴を有する。『不思議の国のアリス』はヴィクトリア時代中期に書かれた作品であり、『トムは真夜中の庭で』に描かれているのもこの時代の末期の庭であった。そしていずれの庭においても、庭が囲われた空間であるというヴィクトリア時代に再認識された特質が、それぞれの物語の主題の重要な部分すなわち幼年時代のイメージと密接に関係していると言える。それはまた子供や幼年時代を感傷的に理想化するこの時代に蔓延していた心情⁽¹⁰⁾とも連動していると考えられよう。

ヴィクトリア時代、特にその末期は英国の庭園史においてさまざまな意味で分水嶺と言うべき時代であった。それはロビンソンとレジナルド・ブロムフィールド（1856～1942）が「自然（natural）」と「整形（formal）」をめぐる激しく論争していた時期でもあり、造園家・園芸作家ガートルード・ジークル（1843～1932）と建築家・造園家エドウィン・ラティエンズ（1869～1944）が共作を始めた時期でもある。二十世紀の英国庭園に多大な影響を与えたモリスは庭園に関する文章を書き残しておらず、モリスが造った庭も現存しないが、1879年に行った講演で庭園について自説を述べている。モリスによれば、

庭は大きさを問わず規則的でなければならず、囲われていなければならず、自然の奔放さや荒々しさを模倣していなければならず、同時に家屋の一部であるかのように見えなければならない⁽¹¹⁾。このようなモリスの庭園論を建築家J・D・セディング(1838~91)が死後出版の庭園論『新旧造園術』(1903)で敷衍した。ここでセディングは十八世紀の風景庭園全盛期を「造園術が毫碌して術学の道に迷い込んだ時代」と称し⁽¹²⁾、整形庭園を正統な英国式庭園と看做しつつも、自然と人工性の均衡が重要であると主張している⁽¹³⁾。プロムフィールドもまた代表的著書『イングランドの整形庭園』(1928)で、整形庭園こそが伝統的なイングランド式庭園であると断言した⁽¹⁴⁾。

こうして自然派のロビンソン対整形派のプロムフィールドの論争が続いたのだが、この両者の共通点はいずれもモリスの庭園論の影響を受けていることと、同時代に流行していたヴィクトリアン・ガーデンを嫌悪していたことであつた。冒頭に引用した通りロビンソンが同時代の庭を酷評している一方で、プロムフィールドも当時の過度な装飾性を特徴とする庭を厳しく批判していた⁽¹⁵⁾。ロビンソンとプロムフィールドはナチュラルとフォーマルという理念の部分で対立するあまり互いの共通点を見落としていたようだが、いずれもヴィクトリアン・ガーデンに対するアンチテーゼから一方は植物の生態を重視した「自然な」庭を、一方は古風で伝統的な「整然とした」庭を提唱したという点が興味深い。モリスからセディングとプロムフィールドに継承されたいわゆるアーツ&クラフツ庭園のコンセプトは、簡単に要約すれば規則的な枠組みに自然な植栽、家屋との連続性の重視、それにアーツ&クラフツ建築と同様に地元の素材の使用、そして建築と造園に限らず室内装飾や家具などすべての分野のアーツ&クラフツ運動の基本コンセプトでもある「美と実用の両立」ということになろう。したがってプロムフィールドの庭にも「自然な」要素は顕著であり、一方でロビンソンも庭の人工性を全面的に否定しているわけではなく⁽¹⁶⁾、ロビンソンの自宅グレイヴタイ・マナー(ウエスト・サセックス州)

にも整形庭園はある。この両者も晩年には完全に和解していたらしい⁽¹⁷⁾が、この論争を止揚した先に現在に至る英国庭園の伝統が成立していると考えてよい。

ヴィクトリア時代の派手な色彩の庭とは対照的に、エドワード時代（1901～10）の庭は質素で優雅なものであり、この短い時期は英国庭園の黄金時代と言える⁽¹⁸⁾。それは第一次世界大戦とそれに伴う人手不足と人件費高騰、大不況、そして第二次世界大戦によって庭園文化が長く停滞するまでの東の間の黄金時代であった。この黄金期は一方ではモリスからセディング、プロムフィールドに続くアーツ&クラフツ庭園の全盛期であり、一方ではジークルとラティエンズの最盛期でもあった。ジークルはロビンソンの友人であり直接的な影響を受けていると同時にモリスの庭園論の影響下にもあり、ラティエンズもこの時期にはアーツ&クラフツ建築の流れを汲んでいた。したがってこの二人が共作で庭を造っていること自体が、ロビンソンとプロムフィールドの対立に既に折り合いを付けていると言える。いずれにせよこのような「エドワーディアン・ガーデン」と総称される黄金時代の庭は、ヴィクトリアン・ガーデンに対する反動で成立したようなものであり、その基盤を形成したロビンソンとプロムフィールドも、そしてその両者に影響を与えたモリスも、ヴィクトリアン・ガーデンへのアンチテーゼからそれぞれの庭園論を確立しているのである。二十世紀初頭から現在まで続く英国庭園の新しい伝統は、ヴィクトリア時代の庭をある種の反面教師として成立していると言っても過言ではない。

物語中の描写を拾い読みする限り、『トム』の庭はラウドン、ロビンソン、アーツ&クラフツの折衷的な庭であり、『アリス』の庭にも当時流行していた毛氈花壇は存在しないらしい。毛氈花壇はモリス、ロビンソン、プロムフィールドが等しく嫌悪した、「新奇さへの欲望」から1870年代に生じた「造園をめぐる技術と努力の突飛な誇示」であった⁽¹⁹⁾。いずれの庭も、不自然で派手過ぎる最も悪い意味でのヴィクトリアン・ガーデンではないようだが、それでも

『アリス』の庭と『トム』の庭

それぞれがヴィクトリア時代の庭園の一典型であることに変わりはない。

英国の社会人類学者ケイト・フォックスはイングランド人の思考や行動様式を支配する「法則」として「極端なことや度を越したことを忌避して中庸・節制を好むこと」を挙げている⁽²⁰⁾。このことは英国史を通して実証されていて、例えば十七世紀の内戦から王政復古、名誉革命に至る流れに典型的に表れているし、イングランド国教会自体がカトリックとピューリタンの中庸を体現している。庭園様式の変遷を見てもそのことは確認できよう。ヨーロッパ大陸を起源とする整形庭園の流行が行き過ぎた頃に自然なイングランド式風景庭園が発生し、その装飾性・人工性の排除が度を超すと今度は規則的・幾何学的な枠組みが復活した。だがやがてヴィクトリアン・ガーデンの過剰な装飾性への反動としてエドワーディアン・ガーデンが成立することになる。それは同時に、ロビンソンとブromフィールドの対立の止揚でもあった。

一方でヴィクトリアン・ガーデンは決してこのような負の影響を残しただけではない。「囲われた庭」を強調するヴィクトリアン・ガーデンの特徴はエドワーディアン・ガーデンにおいてさらに強められ、生垣で区切られた小庭園 (rooms / compartments) という新たな流行あるいは伝統を生み出した (その模範的な例は二十世紀英国庭園の最高傑作の一つと目されるグロスターシャー州北部のヒドコット・マナーの庭に見られる)。薔薇を重視することもヴィクトリア時代に始まった「伝統」の一つであるし、この時期に導入された新種、外来種の多くは英国の庭に定着して久しい。英国庭園の伝統の中では逸脱しているように見えるヴィクトリアン・ガーデンも、エドワード時代から現在に至る英国庭園の新たな伝統に多様な形で影響を残しているのである。

註

- (1) ベネロピ・ホブハウス『世界の庭園歴史図鑑』高山宏監修、上原ゆうこ訳 (原書房, 2014), p. 279.
- (2) William Robinson, *The English Flower Garden* (London: Bloomsbury, 1998),

『アリス』の庭と『トム』の庭

p. 23.

- (3) ジル・ハミルトン, ペニー・ハート, ジョン・シモンズ『ウィリアム・モリスの庭——デザインされた自然への愛』鶴田静訳(東洋書林, 2002), p. 11.
- (4) Caroline Ikin, *The Victorian Garden* (Oxford: Shire Publications, 2012), pp. 56, 73-74.
- (5) Lewis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking Glass* (Harmondsworth: Puffin, 1962). 作品からの引用はこの版の頁数を本文中に()で示す(『鏡の国のアリス』についても同様)。
- (6) 『不思議の国のアリス』におけるこの主題については拙論「アリスの違和感」『ユリイカ』2015年3月増刊号(青土社), pp. 242-252を参照されたい。
- (7) Ikin, *op. cit.*, p. 28.
- (8) Michael Gibson, *The English Rose Garden* (Princes Risborough: Shire Publications, 2000), p. 16.
- (9) Philippa Pearce, *Tom's Midnight Garden* (Harmondsworth: Puffin, 1976). 作品からの引用はこの版の頁数を本文中に()で示す。
- (10) このことについては例えば Humphrey Carpenter, *Secret Gardens: The Golden Age of Children's Literature* (Boston: Houghton Mifflin, 1985), p. 18; 松村昌家編『子どものイメージ——十九世紀英米文学に見る子どもたち』(英宝社, 1992), pp. ii-iiiを参照のこと。
- (11) ハミルトン他, p. 18.
- (12) J. D. Sedding, *Garden-Craft Old and New* (London: Bodley Head, 1903), p. 29.
- (13) *Ibid.*, p. 68.
- (14) Reginald Blomfield, *The Formal Garden in England* (London: Waterstone, 1985), pp. 91-92.
- (15) *Ibid.*, p. 125.
- (16) Robinson, *op. cit.*, p. 18.
- (17) Charles Quest-Rifton, *The English Garden; A Social History* (London: Penguin, 2003), p. 219.
- (18) Anne Jennings, *Edwardian Gardens* (London: English Heritage, 2005), p. 1.
- (19) Ikin, *op. cit.*, pp. 63-64.
- (20) Kate Fox, *Watching the English: The Hidden Rules of English Behaviour* (London: Hodder, 2005), p. 403.